

やまと 民俗への招待

生駒山頂から南約5キロにある「十三塚」(平群町)は、かつては安産の神とされ、願掛けには白い小旗を、お礼参りには赤い小旗をささげる風習があったといふ。興味を抱いて調べ始めると、いくつも事例を発見した。宝山寺(生駒市)、立里荒神社(桜井市)、さらには熊野本宮(和歌山県)でも目撃した。半紙を小さく切って「願望成就年女」と書き、ヒゴに張って小さな幟を作り、木の根元などに無数に挿して

ある。「千本幟」だ。百度参りでも千度参りでなく、一度に数多く立てて、願望を達成しようとしている。

さおの先に細長い布をつり下げる旗は、風に吹かれると大きくなびいてしまう。そこで布をさおや横木に固定する「幟」が生まれた。男の子の成長を願う鯉幟は元は鯉ではなく、武者絵などを描いた幟を立てていた。



常陸神社の境内に挿された五色の幟
=奈良市で、筆者提供

千本幟に込めた祈り

強いアピールを期待してだろう。合戦などに登場した幟は、強い願いを達成する道具として現代社会でもたくましく生き延びている。この生命力の秘密は、風をはうんでバタバタと幟があおられた時に、ヒントがある。物のようにうなり声をあげる。その時、私達の心に何か湧き立つ高揚がある。そのような心性があるこそ、か

つて「軍旗はためく下に」戦うことができたのかもしれない。今も奈良市法蓮町の常陸神社で見られる五色の小さな幟は、人々の日々の祈りを託して、境内に挿され続けている。19日の祭りはまた大勢の人でにぎわうことだらう。

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)



かつて県教委で民俗担当を務め、庶民文化を発掘し続けてきた筆者が、県内で見つけた民俗の風景を語る。